

後期高齢者から更に名誉?な喜寿となり、なにか記念行事と思案の末に東南アジアでの最高峰にチャレンジすることにした。高齢者故に健康診断書の提示を求められたが、無事にツアーに参加させてもらった。リーダーを含めて13名で、そのうち女性が5名に老人を含んだパーティになった。

キナバル山は標高4095.2mある高山で、赤道直下のマレーシア国のボルネオ島にあります。この島は日本の本島と同じくらいの面積で、半分はインドネシアと一部が石油の出るブルネイです。島の人口は1千万人程で、マレー人75%と中国人が20%その他です。山は花崗岩の独立峰で比較的海岸に近いので、写真-1に示したが、雲が発生しやすいようだ。赤道直下のために四季が無く、情報によれば気温の変化はほとんど23~32°Cで目立った雨季は無く、11月から2月には多少降水量が多くなる程度。



写真-1

9月22日 登山入り口にて

9月21日にマラソンの会の知人を含めて成田から、ボルネオ島の都会であるコタキナバルへの直行便に乗った。ダイレクト便なので6時間程で到着し、当日は市内のホテル泊。この街には数十年前に仕事で来たことがあったが、当時の面影は無かった。翌日はバスで2時間程の移動で登山口に着き、入山手続きをした。自然遺産でもありルールがかなり厳しい。入山者の外国人は80人/日、地元を含めて山小屋の容量300人程度までで、予約制で日本の登山事情とはだいぶ異なる。管理事務所でWaiver(権利放棄書)にパスポートを見せてサインをさせられた。これは「自然の中の不

確定要素と危険の存在に対して法的な権利を放棄する」との自己責任を認める書面であった。ここでIDカードを渡されて、これが入山許可証になる。

登山ルートは大変に整備されており、かなりの急登だが階段状になっており幅も広い。全員の荷物のは半分はポーターに預けるので楽であるが、更にガイドは5人について1人の割合で雇う仕組みのようだ。山小屋の必需品も全て人力で運ぶそうで、地元の経済に寄与する仕組みになっている。登山口の1800mから山小屋のある3300mまで途中に7か所シエルターと称する東屋風の小屋と水洗式トイレが設けられている。道はあまり密度がない樹林帯が続き、有名なウツボカズラが散見されたが、花やラン類や蝶などは期待した程ではなかった。山小屋は写真-2に示したがホテルのようで日本の小屋のイメージとは異なる。食事はバイキング式で、部屋は6~12人収容の2段ベッドでゆとりがあった。



写真-2

9月22日に宿泊したホテル風山小屋

壁には負傷者を担架で下す写真が多数掲示されていた。すべて人力であり、ヘリは使用しないとのこと。高度3,300mでもあり高山病対策のために飲酒は禁止して早々に就寝。

翌朝は1時半に起床し、2時半に出発。暗闇の間を急な階段を登る、下界の夜景がきれいだった。風が強く花崗岩の岩肌がむき出しであり、滑落事故の可能性は確かに高いと思った。この山の花崗岩は北アの燕岳などがザラメ状に風化するのと異なり、10cmほどの厚さで殻のように剥離する性質とのこと。したがって表面には砂利が存在しないので滑りにくいメリットがあった。気温が高いた

めか黒カビが表面に発生して、外見が黒々になる。  
写真-3 で示すが、古い岩肌は水墨画風にみえる。



写真-3

9月23日早朝の登りの階段と岩肌

最近地震があり風化した表面が剥離し落下した後は雪渓のように白く光っている場所もあった。

標高 3800m の場所に最後のシェルターと ID カードのチェックポイントがあった。ここからは設置されたロープを使っての登りとなり、腕力も必要になる。周りはまだ暗闇であり、斜面の上下に登山者のライトの光が続く。ようやく明るくなったのは標高 4000m 付近から。高山病なのか体力不足なのかバランスが悪く、両手両足を使ってやっと頂上にたどり着いたのは 8 時過ぎ。幸いにも曇り空であったが視界が良く、素晴らしい雲海が見えた。記念撮影（写真-4）をして 9 時下山開始したが、登りよりもこちらが大いに転倒の危険があり、やはり両手両足のいわゆるバックステップで下山した（写真-5）。



写真-4

「キナバル山の頂上にて」



写真-5

キナバル山頂と下山路

若い人は苦も無く動いているが、老人は見栄を張らず慎重を期した。

赤道直下の樹林帯であるが、高山のために多様な植生は観察できなかったのは、少しばかり残念でした。ウツボカズラの他はシャクナゲ風の花とランが散見されただけ。当然かの有名なラフレシア（低地の密林で咲く大型の腐臭の赤い花）やオランウータンなどにはお目にかかれないのは当然でした。